

～荒地の開拓に力をつくした岡本甚左衛門とその子孫～

浜田市金城町七条に、耕地が一面に広がっている新開という台地があります。集会所の裏には生垣に囲まれた石碑があり、そこには「開原院」と文字が彫られています。

この石碑こそ、この地の開拓に一生をささげた岡本甚左衛門をたたえた碑です。岡本甚左衛門とその子新右衛門・孫の与一郎が作り上げた堤(ため池)や水路の中には、今でも使われているものもたくさんあります。甚左衛門が亡くなったのちに完成した大堤は、「甚左衛門堤」と名付けられ、地域のために力をつくした甚左衛門の名前と功績は、永遠に語り継がれています。



【甚左衛門 生まれる】

大佐スキー場で広島県へとつながる国道 186 号線を、浜田駅から 10 キロほど進んだあたりが、金城町雲城です。浜田市役所のそばを流れる浜田川の上流になります。

江戸時代、雲城のうち、七条原(のちの新開)・若林・青原は七条村といい、浜田藩に属していました。この七条村やとなりの伊木村・小笹村の庄屋をつとめていたのが、七条村青原にあった岡本家です。

岡本甚左衛門は、その岡本家に生まれ、1796 年に父のあとをうけて庄屋になりました。江戸時代の終わりごろのことです。

当時この地域は田畑が少なく、人々は生活に困っていました。また、米はお金がわりとなる大切な作物でした。甚左衛門は七条原に目をつけました。七条原は、海拔230メートルの高地で、木が生いしげり、くまざさやいぬつげなどが生えていた荒地でした。水さえあれば、ここは広い田畑となり多くの人が住めると考え、甚左衛門は、堤(ため池)をどこに作ろうか見て歩き、浜田藩に開拓をたのみました。けれども藩だのみでは開拓が進まないことがわかり、甚左衛門は、自分の財産をつぎこんで、七条原を開拓しようと決心しました。1819 年のことです。



現在の「新開」

【甚左衛門、村をつくる】

最初に甚左衛門が考えたのが、飲み水を得ることです。井戸を掘っても水が出なかったため、まずため池を作り、その近くの竹やぶに井戸を掘ることにしました。木を切り、掘った土をモッコで運んで、のべ 860 人の力で、「宮下大堤(現在の妙見堤)」を完成させました。ため池の水が地下水となり、井戸からはきれいな水が出てきました。ついに飲み水が得られるようになったのです。

甚左衛門は、住まいも七条原に移して、本格的に開拓を始めます。農業用水用の堤や水路をいくつも作っていききました。1824 年から 1 年間をついやして、のべ 1685 人の力でつくった「たたら谷堤(現在の長迫堤)」は、25m プール 35 個分の水をためることができました。農家だけでなく鍛冶屋なども住まわせ、35 戸、178 人の人が生活する村ができ、この地は、「新開所(しんがいのしよ)」とよばれるようになりました。

1774(安政 3)	甚左衛門 青原で生まれる。
1796(寛政 8)	七条村の庄屋になる (23 歳)
1819(文政 2)	七条原の開拓を願い出る。 開拓許可が下りる。(46 歳)
1820(文政 3)	宮下大堤など 3 つの堤を完成させる。(47 歳)
1821(文政 4)	七条原に移住。原中大堤を作り始める。原中大堤完成。
1823(文政 6)	広草田大堤(新堤)作り始める。(50 歳)
1824(文政 7)	たたら谷大堤作り始める。富くじを発売 (51 歳)
1825(文政 8)	たたら谷大堤完成 (52 歳)
1827(文政 10)	初めての検地。開拓地が新開所と名付けられる。35 戸 178 人が暮らす
1834(天保 5)	新堤の工事再開を願い出る。工事開始(甚 61 歳)
1835(天保 6)	大ききん。浜田藩 密貿易発覚 たたら・富くじ禁止される 新堤の工事中断 人口が激減(100 人ほどに)
1839(天保 10)	新右衛門 七条村庄屋になる。 (甚 66 歳 新 16 歳)
1842(天保 13)	新開所の開拓、一通り完成 甚左衛門死亡(甚 69 歳 新 19 歳)
1856(安政 3)	新右衛門 広草田堤の工事を再開・完成 (新 33 歳)
1858(安政 5)	広草田堤の土手をかさあげする。
1866(慶応 2)	与一郎 新開所の庄屋になる。 (新 43 歳 与 23 歳)
1867(慶応 3)	新右衛門 新開に甚左衛門の石碑を建てる (新 44 歳)
1867(明治元)	江戸から明治に
1871(明治 4)	新右衛門、与一郎、導入水路工事を再開する (新 48 歳 与 28 歳)
1872(明治 5)	浜田大地震
1873(明治 6)	導入水路 完成(新 49 歳 与 29 歳) 新開は 戸数 34 戸、人口 130 人

【甚左衛門の苦労続く】

けれども、まだ農業用水は必要です。耕地は作っても水不足のために作物が植えられない所が出てきたのです。そこで、より大きな「広草田大堤」を作り、あわせて、水が十分に得られるよう浜田川から水路を引くことを考えました。

甚左衛門がとりわけ苦労したのが、開拓のための資金集めです。当時の工事には多くの人手が必要で、多額の費用がかかります。そこで考えたのが「富くじ（今の宝くじのようなもの）」を発行することです。何とか藩の許しをもらい、月一回の富くじが行えるようになりました。また、たたら製鉄を行ったり牛馬市を開いたりして、資金を集めていきました。それでも資金が不足し、大堤の工事は中断します。そのうち、密貿易事件で、藩主が国替えになり（1836 年）、その混乱で、藩に預けていたお金ももどってなくなりました。また、大きなききん（作物が育たないこと）が起こったり、富くじやたたら製鉄が禁止されたりして、新開所の人口は減っていきす。その中でも、人々は田畑の開拓を進め、1842 年、七条原の開拓は「広草田大堤」と「導入水路」をのぞいてひとまず完成したのです。（この年、図面を藩に提出した。）甚左衛門が開拓を決意して 23 年目のことです。



甚左衛門堤

【甚左衛門らが作ったおもな堤】

昔の名	今の名	面積	完成年
広草田大堤	甚左衛門堤	21,818 m ²	1856
たたら谷堤	長迫堤	13,884 m ²	1825
原中大堤	妙見道東堤 (今は水がない)	6,942 m ²	1821
宮下大堤	妙見脇堤	2,459 m ²	1820
原中小堤	今はない	(535) m ²	1820

【甚左衛門の願いを 新右衛門・与一郎が受け継ぐ】

1842 年、甚左衛門は大堤の完成を見ることなく、69 歳の生涯をとじました。その後、甚左衛門の長男の新右衛門が仕事を受け継ぎ、1856 年、藩の力を借りて広草田大堤の工事を再開します。この年に完成した大堤は、1858 年にかさ上げが行われ、25m プール 54 個分の水をためる大きな堤として、周辺の耕地をうるおすようになりました。

そして、新たに新開所の庄屋となった新右衛門の子、与一郎は、父新右衛門とともに、浜田川から水を引く工事を始めます。浜田川はずっと低いところを流れているので、近くからは水をくみ上げられません。甚左衛門が計画・測量したとおり、上流の坂松谷から長さ 5 キロメートルの用水路を作ることにしました。地形に応じて「掛樋」「横穴」「水揚埋樋」「釣り溝」の土木技術を使った本格的なものでした。当時は測量機器もなかったので、夜を待って提灯の火を使って高低を測ったと言われています。浜田県の協力を得て、1871 年から作り始め、1872 年に完成しました。（甚左衛門が計画してから、大堤は 33 年目、導入水路は 49 年目に完成したことになります。）

【甚左衛門の心意気は永遠に】

1867 年、寺院から 甚左衛門に対して、「開原院」という追号が贈られました。新右衛門は、その名前を刻んだ石碑を、甚左衛門がひらいた耕地が見渡せる屋敷跡に建てました。そして、今も新開の田畑に水を送り続けている大堤は、人々から「甚左衛門堤」と呼ばれ、現在もしっかりと水をたたえています。

さて、甚左衛門はなぜ、ここまで開拓に力を注いだのでしょうか。それは、ひいおじいさんの砂右衛門と関係があります。砂右衛門が庄屋の時、農地の面積が違っていると強く訴えて、藩に再調査させ、年貢を減らしてもらいました。そのため砂右衛門は、のちに神社が建てられるほど農民からしたわれました。しかし、本人は、おさめる年貢が減ったのが藩にもうしわけないとずっと思っていたそうです。その思いを甚左衛門が受け継ぎ、農地を少しでも増やすことに心をくだいたのです。

甚左衛門たち以外にも、郷土の発展に力を注いだ人はたくさんいます。私たちの今の暮らしは、実は、昔の人のたいへんな努力の上に成り立っていることを、私たちは忘れてはならないと思います。

【水路工事に使われた土木技術】

- 掛樋**…溝が掘れない岩の部分に、竹や木で樋をつくる。
- 横穴**…山の中腹に穴を開けて水を流す。高さ 1m 幅 80cm ぐらい。
- 水揚埋樋**…水の圧力を利用して、低いところを通してまた高いところへと水を流す。
- 釣り溝**…土手を築いてその上に水路を作る

導入水路のあらまし
総延長 5 キロメートル
坂松谷から甚左衛門堤まで
掛樋 3 カ所
横穴 3 カ所
(58m、145m、110m)
水揚埋樋 1 カ所 (108m)



甚左衛門をたたえた石碑
（「開原院」）